



半掃菴也右著

茶書撰物初



酉のは月経れ茶と云

同く之茶捨や戸とほくき次

取且去は世成道行一ち有

目には砂粒くさ世れ紅や屠獲袋

六十れまきくしり撰物の茶と

止ぬちあり

茶止る春に純名や 五六十

田舎の隠居のあはれ物事

田舎の隠居のあはれ物事

娘に朽く朽く

義重よ父もこころいと泣くおと

けしき百々に

一日れふも ゆきゆき 百々に

ぬるれ流すりて

とまれ世や 麻木の箸の長みり

けしき暮に流す

送るもれ流すに流すは流すは向ふ

半掃菴也右著

若書撰物記

雨のは月絵れ事とす

雨のは月絵れ事とす

取且去る世成道なりあはれ有

目に砂粒くさ世れ 紅や 扇蔭袋

六十れまきしきり撰物の事と

止ぬあはあり

事止る春に 仇名や 年六十

田舎の隠居のおとやの事書きた

田舎りりい似てその書く事年れ市

娘に朽くわい

義重よ父もこひりと泣くおと

けく百ヶ日に

一にれふも 帰るは 百にぬ

ぬる秋露まうりて

とるれ世や 麻木の葉れ長み

けく墓に清く

送るもこれ系に命にけれは白ふ

人れ憚り

あゝ葉りりちりめ替の長うた

百担う彩毛く強に

涼う勢やすこい夏ありく徳層

成瀬氏六十賀に

本れ子も君の歡のいらら有

有舞ありれ勝列に

目ハ借り一宴士とるれハ佳も

如舟三十三回忌に白と毛けく

若と又て啼りハ低り一 郭二

笠寺と題す

寺れ名にやうく笠さやうく田植の

お本四時園六十に如るに

とやとるもりの代に松乃接木哉

田舎れ人日市にれむしに

矣おそれのおまわり

巨煙くく十足おく摘せも葉お

年れ如人れ求し一懸す

四題
と一竹に如れ

多休一やあしとくしうりふ老さへ

と二梅く一奇れ

梅え一王母の松も身うん

と三葉に奇れ

千代とゆく中に居あり葉畠

と四葉に奇れ

万葉もやうく子とて葉れ茶

也の武州く共名牌よ二白

風巾さねくくさね凡れ役ふ

枕ちりね梅さえ跡れ世といふに

は草帝とく歌若れさ船舟画

うねるふりくみんをいふその
名残らふやうにうね

舟乃即とくうらうらくれ月いう

人れ七十れ賀に

み代もはむ扶とや国につく

人の求によりて務る三題

う波子乃波の橋

給うはあはまの波乃はらう

鳴浜れ山吹

なう家とくは近治山吹のふそ

本芳れ五葉

本芳若葉に川はくふー初五葉

人の六十れ賀に

ちとくけくきういちこれ蔓長

岐山より濃ううみ橋りうと謝て

杉れく名れ園庭秘くー濃うりう

九月に武列より上れく人になをす

葉にまらん人ー友さく先咲ぬ

いすこまう濃陽れ人うらう

奇さうれとくに

粟れ穂やあはてうれつく 国鄰

蓮二房九七回に

多もなけ柳〜〜〜〜〜

人れ三四名〜

表尸三度れを柳〜又も多れ

佐州飯田の人〜訪れて

雪國の人に死〜 表乃菴

酒れ粟の柀儿〜訪きて

酒れ粟の人〜〜〜〜

初さふ城まひ多人〜遊居のさ〜して

あゝ蒼あれ世そ印〜け 法乃心

酒亭の新宅と訪ひて

垣依〜〜〜らや柳れうえ所

波山の人のつひ送る

蒼ハヤ〜〜〜れ穂にわ〜小船航

あ狂父の妻氏吊よ

さそ落〜〜〜と折れ力さえ

六林まひりと送れ

一〜ハ早れ志帆なれ別〜う宗

時第菴に帰れ入唐れ沙法

蘇州下

六

八月廿九日仙魯寺に候す
 月と月のありさや 詠れ人の筆
 生あねあふ死あり生なきことの
 竹と死あふむれあふ者
 雪道も死あふむれあふ者

漢物記

枯木に物れ後に漢す

紫うくとを乃梢とよく 物

小松系乃画

そのり。減り目ハ見え守 小松系

筆れ画

ふらりてとよふ一葉のり 筆ろ那

猿はりのの絵に

善口れ弁被服神に 猿はり

夷れ網と肩にのりさうの画に

漢物記

七

楊柳大美人を かこくのみを

三つに絵とからく機とく浦の
管屋と坊々

浦赤く 船歌とくも 船れ系

悔坂れ布しゆふ園く

蝙蝠や 一母寄くハ 名れ智恵

牡丹系れ牛ふ寄く名く

玄鏡人の名にわたりや 黒牡丹

瓢く 中の図く

約れわね瓢くと 啼や くハ 虫

湫の橋く系と流ひけりる様く

葉と女 歌入れろりや 名系とく

鳥の羽成ひらけたり絵陰く

鳥て 下すハとこれ 時雨ろ 山くは

瓢く 揺鈴のとく有りく馬く

夕つかや 簾のとく有りハ 雲のとくき

鳥く牛に人の名く 眠れり陰く

美に夢ののせく 涼く 名反響水

牛乳やに 飯きりれ陰く

喰い 砂子 一把と牛の 名やの 水

吉原手紙

福寿子に終りに

積るの肥やきして福寿州

六平仙の園に

目くくや中の一とを女房に

萩に終り

是のけく赤地を御ねんは錦

棠に終り

懐に似く鼻を刺す香や棠のふ

高に傘持身ようを酒やハク

雪に傘持身ようを酒やハク

富士に終り梅さう終り

白ふのハハとくに存りて富士に雪

大志に終り

泉を希に沙汰ハハハにてハハ

富士に終り

ふくまきくもに不測の富士と三保

筆に終り遠く終り

盗人の机を板もわりかきつり

唐室に終り終りの画に

朝起と終りくふや終の巻

吉原手紙

乙

傾城のひよりまふるる

鏡くは老もつらんおとなく

定家口信成のりりの因

穿れられえはくふえむまれ

布袋の琵琶とゆく画に

衣のほ白うや枇杷れう

垣り小角夏の画

茄子よハカリしゆと小角夏つ

蓮池り蟹れ弦

横りゆり月や蓮池り任た

凡れり燕れ弦

凡れに一声はり弦はるり

雪に柳の画

雪れ舞れりも知れ雪れ中

五々々々々々々々々々

さるの落や家歌の楷

柙にるれ弦に

胡馬も今水やりむる春の凡

柙り時雨とまきり

えりやとて驚りも柙り

蘇州下

竹に梅の葉とてくはる

七賢れあくと梅の葉や 簾乃井

柳に牛の鈴

牛の舌は鈴押し せくハ角も外

指滑し物とてくはる鈴

指子本のねハソコ 木のこか

又ハ一園とてくはる人の求

うらぶとの指体もあはく せ先れふ

こころいハ一園

梅のふさくやと鈴れ 雪宮より

西の柳陰し 糸鞋の紐と

糸ふき

ひとふの袂は多くとてくはるハ糸鞋

紐の柳し 糸ひつくとて鈴

糸ふき

足付より 鞋のたきと糸

指の巻よのかりて酒と飲む

顔に柳くめ 巻れ 一ハナ

兼れあより 岩と書

瀏明く 岩や 頸中の 一ハナ 所

羅

上

橋の画

橋つゞや花折らぬ多分橋つゞ

本屋の唐人のたふたふくる園

馬さくも月をてつれ ありや

瓢の釣のそつる絵

おつゝ入答よ月をれ釣なつ

女のどとちと塔と遊ぶさふさふ

盆さくつりあつゝあつゝの橋つ

傾城の絵

ありれ柳さくれ思ひぬ月さく

女のあつゝあつゝの園

橋もつゝと下あつゝあつゝ

瓦相の画

あつゝとつゝと西瓦の橋と畔

藤原

除白追加

辛酉此秋洛西光明寺へ詣は還

途巾一の吟

二日一を途して三日ハその下

張る旅

大佛と望りハアハ月目に之日の月

布川山

布川れやもや 綿きまもさか

子の一のおハ園も秋や

岩にとまればいひを

兼やといつたゆりて

萩屋うらも秋れ 茶も

瀬田の橋秋とこり

明ぬねの長はわり

義仲寺もく

啼つまも

大佛

大津経乃息も

玉章地

玉章のれ地

藤原下

法宗寺

教指れ分乃中山 程さる

清水奉納

ととと 礼宗も千種の内よれ教

中野寺

空れや〜に及て宗程 善を

清水本口の柳

列き〜も花り待川 善も柳うさ

六條〜〜大工善徳と〜程

と〜君〜して海程

さん樞ハ松よ儉〜 美里〜程

西山〜程

蓮生、流 刀夏に あり程あり

松れ尾

秋月れ松乃尾な〜と 善宗程

西川橋

西川〜と〜善宗〜と〜あり程

中野や

〜程を〜初あり〜山宗程

〜川

蘇州

十一

ちり交ふ點に柳や、くく川

あきくさ

望のふや、遠く、あき、あき、あき

小金山の時雨亭

あき、あき、あき、あき、あき、あき

志岩

松茸と、あき、あき、あき、あき

あき、あき、あき、あき、あき、あき

あき、あき、あき

あき、あき、あき、あき、あき、あき

水路

松梅や、あき、あき、あき、あき

かき

あき、あき、あき、あき、あき、あき

あき、あき、あき

あき、あき、あき、あき、あき、あき

鞍馬

あき、あき、あき、あき、あき、あき

祇王寺

祇王寺に、あき、あき、あき、あき

ちり

新書下

十五

寂光院

みろろ花や女座れ水月のこゆれ後
矢脊に流るゝて麻の声とすく
身をやせにまこゝや藤子の麻の声
比叡山と御ふ日ハ月さう
せうとすゝこ本さぬ野さや 枚の音

山王

柿うゝ意とれそや赤し猿のうか
辛請に藤の吟と思ふ
秋芳に終ま似てよるさう川木

石山庵にさうわく

ハツ乃多にわくし石山張 秋の雨
後や戸

うゝみ山むゝと厂れ 猿やのこ

醒々井

醒々おれこゝや麻乃 鈴とこゝろ

度々の後

とらとら一葉ハ花し 其後追江

不破

春さこれハ野さのなゝ 不破乃園

古書下

十六

羅漢下
三十一

福壽山

ちふふくはふく山ふく山ふく山

江戸友郎六条の白六條より火く
くくくく

山廊初暇

菊の中の家あり山乃初日新

鄰舎共禽

慈やくれく声くれく鄰

喜山南麓

悠然とく山すくく南く歩

牆上植樹

垣角兒れ鼻に木屏白いく利

西之志續月

三月月残るれわくく乃破れく靴

芙蓉咲雪

上ハゆり乃咲くくあくく富士の雪

羅漢下

三十一

藤樹

藤樹

右

兼月輯

三編

妻節

門下ノ足跡朽やせし一の友あり
吟ふくも疾く起くもるれも初日哉
宵柵とや〜〜菴あり忘方くれ
男うはね志より歩て〜〜業ふつこ
室川〜〜おの唯〜〜まとり業拵
ねええいやん〜〜足跡法や若を懐こ
卵油〜〜味嗜〜〜つす〜〜蘇う那
ぬ〜〜すれぬ目〜〜相〜〜あり業先の茶

藤樹

藤樹

雑草

十一

あましくと唇ももえそく木のこゝろ
まゝの梅 眼 鏡 ごとく せしむひくり
齧とりに鼻とわねともんた結美
茶のつけぬ流も梅のはうりぬ
解 黴て北へ咲く雪まゆ花も
花はせしと極もや花ひて梅の花
雪へ咲く梅も人もく子供ぬれ
冷へもせぬもの川にゆき子のり
餘花月へくくく赤く梅の毒
梅もや柳のうくく度く

うらぬと成んて花もすくぬ初春うれ
きやわう足あくと咲く消や
きや五斗花指株とのうれこの
うらぬと成んて花もすくぬ初春うれ
川もくハナ 梅の花の春乃州
傑てんく墨子も泣ぬ柳の柳
交てんく梅もさきさき柳の柳
尾寺に利 花もさきさき柳の柳
折らぬと合点て雪の柳の柳
帆へつれて走りやふなる柳の柳

梅

十一

根はひく心もくはるもやれきく那
即丁切くんは家里は産る那
をれこのく者おつてむ、のをみく那
墓場よははらうもえんえは様く那
千代能うはとりー 桶やちり様
大の声は涙手にきー 然 月
幅幅おまがりー 産るや勝月
山寺お種もくまうにおる月
野てきく、飛治のおまへや然月
ゆれ丁敷さえん足これおる月

雑草

廿九

三日月能産や産る乃袋 ころり
ふし女のようにれおるや田りー元
海士のまにまゝぬまはや田標元
業れ舞のわけかおるー 雉の声
業のまに能おるー 石佛
産るまの川人と産るまゝくまゝく様
溜池や去年の産業より 啼 様
指さしー 須广おるもや啼 蛙
四五升の水も住るかりのれ
張りの紅くおつて先う那

雑草

廿九

お代りーを連もあ。ふ子猫の燕
おー世活うに階子やいのり
完帳の目もあめりり ころ 椽
驚もけりてと合もつとや最度り
後人ーをささるくさるく
之掃除の目とあくくさるく寺
若葉に友あはれ葉えとさるり
掃く人の折ふ人比ふはくさる
ある系ー 踏くくはの礼と
葉の曲人望につくひて葉の最

新集

三十一

ささ風れあみあまや 是椽
山吹や下も鳴くて 雨 性
多れ葉に川あきまのりー
維一掃く河柳あ乃くさる
下とえのらそ艾も蓮く
たくまやさるくは経の本下
掃溜ー 驚るは葉乃ああ

新集

三十一

手紙
二

三

夏初

まごうり 親に及せしに 給う那
りし 暢まとのいん 常や 文を
紋所うまに 在るの ありせう那
乃に 皺ハ 候ても 珍に 給う那
け 毒や 札まハ ありし 事 多 紫が
ま 突り 見え 人 志 け け け
あん け け け け け け け け
諸 け や 二 月 ハ け け け け
け け け け け け け け

手紙
二

三

夏う漏れとどろく頭指、不活堂
一輪と蝶の吸あく 牡丹の那
舟の美に咲足す 垣の活るふ
葉柄やとふに 盧生、夏ふむる
竹の子れ身の果れく やあ〜あ
笛や大く小使 志うけ 切
扱ハ夏秋昔のさう ぬお〜と
すうぬおのけ 捲砂のりや〜ま
け〜と 三声口之と 消〜ゆ
流ひさ守陽友の年や 那云

竹の子に脱捨らゆ〜 垣半
足流ふ〜らや 殆瓶〜 杜多
山吹の存存 嘘やかき 津〜
志〜と 子れふ〜と 先れ 葉うか
葉合ふ〜弱〜 一〜と ぼ〜と
おの 風 子よふ 又 福や 葉う那
惟光とあ〜と 向を け 改きり水
お 借へ 小 標の 末と、 やり〜那
時ハ 个 系 祇の 誓も か やり〜れ
志〜と〜ハ 亭〜と〜と 迹れ 改きり水

三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

之巾一糸下女尔故やりの白ひ哉
田植より坐若ぬ踏む能 又さし
滑のしり流もあしして田植うれ
おひ退く島山子の坐也 田うん時
男うそわししを更す 田うん坐
踊うは並らぬ 母も 田植への形
原のふハ池しはう想て 田草お
君う代やおりのねくうんこ香
本にうけし草あしひし 疎教香
うそ 原の目に夢又うりのわむこ香

横を掃して守地奈ありうんこ香
糸波よりには波ハ喜し 麦畠
おしりうし七量の夢やま荒りり
まもまもくく我門まもてま終が
材く口まもや庄やとまみりし
は月すの体やに横の幟うま
合歡のふ小信とうりもまもま
さみこれや故まもも中まもあさり
五月節や野浪人あつて行く子
梅雨晴や入り初音のあさりり

三十一

三十一

顔身をの店よなうゆや 初茄子
多れ集く花ふ枝のり 橋桐の玉
待つさやぬまの深さ兒 友死愛
新物く笛く 月さし 安帳くれ
子うお集くくくく 八のき 敷帳の那
夕顔や人すし 女見つけくく
蠅のまゝく 蝶めけくく 豆麻くれ
浮れ方ハく 横又おく 暑うか
枕つくく 鯛ハ捨くく ありさか
抱く子ハ負くく 子くりも暑う那

う其の縁して 終因のあつらう那
涼くさや女の杉くく 又宝きせき
赤まの藤おハくく 椽のく
遊ひのけく 犬お場とく 涼くれ
くお桶のあく けり 収れ 居る
誇ひても せく せり せれ 居る
蟬たうく や 終の近く 一里 塚

三十一

三十一

秋詠

肌を秋枝にまきりきふ乃秋
しーすの油影くまや秋の風
朝うちに秋をまきり唯借屋
秋来ぬと老に思ふやう染の青
初々くやまきり秋の川や釣瓶縄
油のせぬおとろや夕日の秋
敏行を思ふ川さねれ一葉う那
くは一葉らぬや厩跡峠より

三十一

三十一

ちひとくく桐てなれよの一葉うね
蘭ささぬ鼻すも秋と行くらう
鶯も是とよむう 後月橋
あまのあけ橋やそくき天の川
月も借ふ早の盃や 青の紙
又の萩八回りけり星乃別う都
鳥居き青月ハ若すも 魂を
くうくや芋になりしめく盆の月
おくりたやとくしてをむ又秋
か限者のふに下まのあふ確うね

又おのあく明せうふれくうれ
おれ下ま成院くくくお躍うか
お川せりと流るるおやうりか
辻番を盆く一枕もり灯うか
吹れぬるに湖の傍や初わく
給つるや嚏とひくく志をくおひ
鼻くむて於くは男や 各来槿
くくすけくお山子鳴く 々々 養
去来一尺くくおお政なり中は声

集巻

八

いろくくは高き一遠く空分る那
埃溜乃落や下結の穴目く
将人より意うさそく一麻のそく
ら松ふりしとわらん志う那声
紫ふりし山も泣せく麻乃了念
光のまより仙拵泣せ那 那う那
根まへくも油のなうぬ那、の那
丘寺れ証くくつくまわさう那
いさくひの隣もわたりし那う那
子ハ爺う據りし泣せく那う那

かうきうくは物あるく啼く柚味芳うそ
結及やかまれのう那 雨あうり
標の鳴ふ方と表う 結既 義
系たうぬ涕りし 任てせさう那
安よのに案山ふとら何寸舞せうれ
泣て尺さそ度以 馬ひつく舞の哉
仏への土産も其う那 玉野う那
粟得りし 結既す何うやうりう
空て守と人ハそくれき結う那
麻追ひやも山笛うりハ 情あう

権下

下し

脊とのりて高りハ子一ハみの子将
草うりや下子にぬる能きうらり
紅草一り指やぬくひて能田娘
約下子の半一り見えて能於能於
之又しせぬ夫と原一り葉山子うね
らう能くといつれ葉山子のおう一り
良選のおき一り神一りか一り
月比能ぬ半ハおわえて葉山子一り
葉山子一りの世法くること田川
枝さなき様と能く能て田一りか

波一り能く一り能く一り能く
葉山子の世道くる能く秋能き
毛援さくる能く能て能乃る能
二火三火之里とくる能く能の能
一り能く一り能く一り能く能
挑灯の目能と能一り能く一り能
能て能と能能の能さ一り能
一り能く一り能く一り能く能
能の能一り能く一り能く能の能
能月や能一り能く一り能く能

能く

能く

穀のハ慈れ目もあがりふれ月
三藤と葉山子一軒伐りせよの月
十六和や欠くに女房とら育れ園
世一おとと膝や火一菊の舞
青く水もや白石の録もいささ
酒買りや子意童あがりふの菊
茶ハ脊産れ細り瘦より菊つら
伯母捨く又つねくまなく母の月
つらつねの星と唯水や母の月
秋もりて待るうけ一母の月

母の月辛う坊のハ慈り一り
うら柄や根うらうら母の月
床中にならぬ寺れりうらうら
鬼てうら母一うらうら紅葉うら
折く秋や銀も色つらうら母の月
り母やかくのうらうらと居一り
母の列れれつら母の葉うらうら

権下

三十一

三十一

三十一

お記

丁の傍は七かうくまの志くられ
傘うまハ世話と新儀取くられ
ゆらり其と一人能く一時白くれ
青夜々芝居くくくくくくく
忙の乳障子にと何れかまの那
まうくくくくくくくくくくく
風や庭おく矢櫓乃りくくくく

三十一

三十一

木枯や布けとも瘦くぬねのねと
こが〜や三保みいひとり木の葉
〜もつうぬる葉うれ
紫のさ〜も端まぬおらこ我
〜い空にぬのさす葉うれ
今於稀〜は見えそる葉うれ
穴掘て狐の〜やむ くれせうれ
土佐〜音の〜ぬね枯や
互〜人とい送ぬ枯の〜那
鶴奴の果深まぬ 十夜〜那

峰搦のま〜ぬ 十夜〜那
垣ゆひ結や〜く若く帰〜れ
待〜もすそそ麻おろるそ花
番もありと近目の志路やゆりそ
似〜もぬるぬる〜もり葉
〜側に野け〜枯やかえんそ
〜もや〜と〜も〜も
〜も〜も〜もありそ大根川
〜も〜も〜も〜も大根川
〜も〜も〜も〜も大根川

梅雨下

三十三

遊割の泳く通す 魚を夜に
神口よりおひよわおぬ魚を
之縁の縁よりおぬ魚を
はやくさくしん年より
奴より尻より
南のよん人より
瓢んを霜より
何て似せとも
雷の形けり
腕八乃目より

噴^カき^セ川てあはれおもわり
梢の火やうし
後りけく極す
東政の忘りも
そと声とあらぬ
傾城の
埋火に
初さう
凡より
たり

を垢敷や菱の人を既雪能中
えくこりや野乃目くハ家もねん
跡つけぬは巨魁一雪見くれ
雪見く麻くふ所ふ所
起て掃くり粉麻せよ雪れ門
雪の敷やえをてくは音らけを
巨魁雪能葉倉わハ雪の雪んせん
く起くくく雪能粉
竹の麻くは為もくく雪れけ
竿の形ひもはもく雪能梅

とさゆ一ま物也師走乃後磨
藪とくく掃く雪れくり雪能
多ひも能掃れ雪ありや一の市
掛とひや雪ふ門くく雪をくえ
横くつく種とくく雪能餅の雪
世の介や麻を貫く雪能一用と
煉掃や雪能く搜寸極め下

新書

新書

新書發抄

東上

多きれども衣食あり鬱六千一
 舟と鷹いで誰うあふれといふ心
 乞て足ぬ弟れ一とくや 福あ州
 伊勢能松洲に訪ねく
 せりれりわねとせこれの菴とくを
 岳とく山寸人
 小車一や家越一能周く嘆合也

古

七

三州

三州の仇士に訪まら

披ふらへく量死し 立乃仲

茶席の歌と後れて

茶能舞や世に本これの枝即し何

雨の中一の立秋

雨のおしに響ききて今侍乃路

中妻しおられ人

物分乃しんともいひくうき列進

茶布の再乃表と吊し

侍乃收金と志すし けりれ哉

舟と福千人

舟は舟のしりふ枝さし

武州へも人々送列二与

くしりしりふも人々送列首途水

臨れん舟も女とむしりふ 揚雪蒼

舟申の別後し

舟に狂へ曇りし深ぬ 際をん油

舟多子の父能表と吊し

舟これいふし 柳や舟も涙と身

病中一仲秋

三州

三州

昔の事

三十一

名月や家ハ侍のきりきり

日後の月

福崎の家影りー々存乃月

海洲とていふ

秋に輝く位の人命の命

あけの人とていふ

ゆき又雲にふたむくあけの

きふてもあけのきふてもあけ

ゆけしぬふもあけのあけ

芭蕉忘

い川のせりー流る水とていふ

等児法師とていふ

菊ハ秋ーのれせ乃蓮ハあけ

室の月化光子とていふ

人のあけのあけのあけ

胡堂子母の妻とていふ

あけのあけのあけのあけ

あけのあけとていふ

あけのあけのあけのあけ

人の七十のあけ

昔の事

三十一

七十一

七十一

七十や色くぬき乃るはくわ
娘とたふさけ氏家へ

女支く〜婿子も目切〜杖納

五中と悼

豆敷〜き〜釣う巾のおくれ哉

舎整った母の喪と吊

燈送り乃買とのき〜や〜の市

令思存事細人のきりめに

舞〜然も然 然〜そ英

八巻あけと送り

証談の人のけろ後の 柙 陰

化光子一團志

一めらり多向〜うに車

妹〜か〜

くつれ〜ハ〜先〜つ〜も〜あ〜き〜

農業と子にゆかりて徳指とるとかす

秋中川や飲の世話なきと葉 畠

多申〜川〜御と送り

つ〜〜法系〜も〜も〜丁〜也〜一人張

武州 藤の竹塚〜と白

七十一

七十一

かゝりけや後りー水鏡を白ま
露月七の伝母老くせう皆あふさ
三十一 汚ひよりーやーハ例
あゝに松あふさく皆あひれつ
さあさあふさくさうを強ふさ
あもれく何れくはゆゆせー
席に用もれき色紙よものあさ
何よせせせさうーありり
ーやそくくわきわくみと
なり多れくさまはくーの集と

こゝを紙くー書つ

妹捨乃名と野にくれーま乃お

母考父の喪と吊ふ

竹のふも尋しよぬ 雲天位りゆ

瓦光子伊勢の神戸彦の振きり

のり紙儀列こ

茶子美ハリー名のふれ首途は

書ー子ありーと送る

又送るやゆあくくふさの元如り

化光子三回云

枕粟のりうんしりり 三年一え

去雨子母の喪と訪ふ

なまきうしに一夜坊舎給ふあけうふ

本唄一同え

せうしりにりしれぬりあり 石日お

む和一ふ成共ひりり

弘の枝とふしりり 一き一葉う那

夜多父の喪と吊ふ

なれがや甲雙れきありの茶 船

越の人そぐく 世地より物の茶鞋と

解て吊うま屋とも訪ふむき喜内も

うれと妻老の若とちいし事人よ

如守五月はなまれ客とた附して

うらこもれかすして新紙の人よ就と

いしく白眼の情とつめく對するき

是うれとのう春乃ん若やせんを老の

笑とんえさりり 春の人れ心あはれ

されともちちうれ後よのゆとみはうん

中あんがりすへれは海國のものうりよ

す面の減りて子魚らんハ巾も
又切さるゝいと倉卒の二方成務て
西膳と代ふ

えんはあつたすもせぬ月や坊屋一を

も人わつ店と訪りむのえ容を
比ハ素との暑とらるゝとて丁て
吏と断とふらるゝつれなく謝
々れあすハと屋と見控らるゝ
悪志よとて苦みと叩く

さすゝり心よりくぬくまをくく乃
西流となをくくはぬま乃月ハ己と秋
ゆりくれば候して

かきん^三屋捨て教とくくわしれ々
強湯し兎河青く訪らり候はを
長くこのすまのまにあふ大根乃
脊戸の白に瘦れぬとあれと
茶とくくわいとおくくありて

とくくろくく大根も細く旗は細
是より北張りお断して林を

五合の御成りありては隣子も来征成
おろし

又送成も系ハ多にあり 風中

三月廿九日信昌寺に於て

寺へ其く種まきし其乃わいれ成

本合母乃喪を吊ふ

藤のふや 喪し成神とぬれり守

丁トきひのそりわくを多成と

しし 災ふ家と守て

二と成もやんぬるらんさ成あ子成たくれ

東條氏のありき送る

ししや成の十日きし成た日成

祖の百年忌と成り一人ふいと

送れり

しし成り一年にかきく 百日後

東に成り君月ありたのと成ひ成り

先生成り成り成り成り成り成り成り

泰平成り成り成り成り成り成り

しし成り成りに

しし成り成り成り成り成り成り

そのむしり源判り

扇加柳 柔の糸や初志

妻にあられり人

又色りぬれといひぬれ先

巴良妻とむえゆりに双親

意ありて

巨燈も救くありぬ 二女史

三川の序草と俚

そのむしり源判り 祐也哉

羽川渡治明神を初志定子

そのむしり二白

呼れよ 不器と蕨の葉塵

教減してそとれゆくや沈の層

撞撞の雲とつと題とさうりて

常の形や町 撞撞の家を

市中 世と道は 空を菴と

訪ふ 人のさばるれは

半のふれ友と形 月をさうりて

只 睦月のおゆれは

蘇州

時

勇丁も仕上るふ業や浮世の門侍
 位流路や松本の府下多勢
 天満文の度おもしろ細のらとと
 先らねし一社社のあそびと
 さ故あそびのすていしゆき
 このうら境と痛くうら老の身
 思をうらとひやりて心よと
 ねしよまねのこ

外も初れ梅よりも乱舞ふこ
 うき唐九三四五

ついでに治事つやもさう
 子とけいてはくし人
 見せくゆけのあひ子あハ
 七十かす
 君も初れ梅つく園の
 後娘のうとをけく
 口知のあもさく
 病起の人
 けぬさや
 しせ

くふの神系さへ 志うれく川

又

世の人能あふハ括まは 塚の雲

南堂三四云

三年も養とまぐり 雲くくく

五月巴笑う子の養まを紙紙して

養まや延れりし川も冬至のく

君山先生七十賀に

之美とぬとじ枕も此りや 花はくり

堂くく六逸の額とく竹溪の遊

とくくく市中一の光徳と坊くく

一本の桜もくくくおけり

名ハ作と呼まくく花のあけく

尔遷去或くく列れと若あに

府と候すくく書つ

其の旅蒼くくたれあつさく

くは文事細

拍子やくくはこけり 雲乃 雲

賛物記

麻呂頭の画賛

石ゆくと踊れ麻呂の 文 蒼

葉の下に蕙の節の画賛

矢ひもどぬるに ねふしきう那

音の下と新の歌に

孫康うゑりし 初てや 雷乃下

女の子けまつく画賛

くみつくや ちさふぬ乃 蒼とく

武家歌に寫す画賛

蘇州

四

いさゝのやちくくしと益を月

梅より号れ画

久しきこと志を多しと云 梅れを分

蓮池に

蓮花を又泥へあふせを別

雪のり

家数乃雪んく雪をそはく那

唐人の馬幸に

もろこし一月も月もやあむうえ

ふまに

山ハ秋う一子 厚もあくひ

柳よ繚のり女

莫もあけや女の書々於柳みハ

鬼の法を多しと云と致くに

於うぬ肉とさうりや 寒を念に

三類を画賛

於秋やあけりりと三川の教法師

雲のゆり物

くてもあぬ月もゆり物くれ

飄より女のゆり画

蘇州

四

中ぶ顔の若うや一夜うしれ事

月よ子多れ三のあふ園よ

三川近うかそつる月のふもるうか

處にしつる海

五六ぬの雪つらりりり夏あま

積中つ川のに

月より之う様にしむむ積二つ

枿に響り

うしれうせ経よ書枿の白ふらハ

芭蕉義筆の像

二夜かー枿尺せうた紙に雪

山一飛鳥の画よ

月かそ紀山や道ひいー 切ら鳥

枿一雀のに

そくに木ーして枿一なぐ雀

獲のつらりつりて水の月とらに

あのみ月やさーとーうさな

狸の坐深みあに

衾希さふりや狸のあふさふと

波よ蕨の絵

かえり波のふきや 浦の秋

想えれり

冬枯や 寄中一ふんせく 年々進

三平二満女のに

淮橋と 寄中一ふんせく 夏人州

秋海棠の画賛

名と借れハ 眠れも 似たり 夢のふ

鬼の馬をさくく 寄中一ふんせく

大津絵の幅に 鬼の角一が折る

一が角うかれ 寄中一ふんせく

虎の皮や やくやく のきはる那

お霜月 鬼よ ねも 似合ふ

夏塚や 野ふり 寄中一ふんせく

布袋の舟 寄中一ふんせく

橋の場に 袋の夢 寄中一ふんせく

若の傘と 寄中一ふんせく

誰は 寄中一ふんせく 初時雨

芙蓉の 蝶の

庭の 蝶 寄中一ふんせく

浄土の女と 寄中一ふんせく

蘇我

三

顔一 杉の鼻をさうりも脊負たり

を月に猿

日寒一 人の色ハ神一 ちむ時

蕉菴の像賛

番八今も極 尺をうけ 桂の木並

文科 田毎の月画賛

川あしや月ハ田毎のつらり

皇山の画賛

涼風や日中一 山の 並新

蕉菴像賛

きよとけや瘦くを木の影り

薔薇一 多能に

香宿の美やたろに汁ハ影り

水流きく岩に多松ニ本影り

おと影り

あうらけや絵一 書の子 維の声

徳徳師の鬼と舞すに

鬼も第一 納於 喜のそ 廣一

徳徳傘一 鬼とおうて 鬼の

よあ一 とうり 又えう 影り

蘇我

三

影足ぬハ志ん氣志られの傘此下

き山ささく松原も不肖あるに

やうささく松原も不肖の本店うが

うに幅幅の松に

かハ切りやうに松さうと多クみ

月了解の画に

歌法師も目のあ松崎の月足る那

梅のうに香

香一掛織らむ堅カおし一葉くれ

並葉の松れ袋お敷うり志る香に

うらひとに耳おせ松乃敷うり

竹うり香

あうりや竹うりも物く香れ夏

猿僧の系懸の紐と松おる

系端と香に松うぬかさうらりか

竹うり雨お披うに香さうり

約とらけ構りぬ神の志う松うか

山多の画

雷のゆれ近き雲陰お野山くれ

張景節に

約の如く法やけりしは海ししき

海棠の尾長き

ふしり尾乃りや海棠の葉移り

葉よきののしりしは

葉ふりやけりしは

春のゆに

葉畠のあはれ野とては

蒲萄の肩

けりしは

種魁しは

端幅や鬼なき里のは月

梅しは

梅の体りしは

月よ葉冬しりれ

梅の種ハ葉釜にありしは

梅しは

ふふたりしは

布袋の袋

新玉の袋のしは

福祿寿の上

あつたはまを風のとほりぬ 園庭う那

雲にま

水のうに様くく 雲乃路雪一孫

本滅しりふ

月みく終ハ終しして本滅州

井の傍尔蕙の画り

柳うくをまやとくして蕙う那

象が肩尔

喚も折る鼻のり巾や 柿のふ

とせ成りし雲が

赤う折乃雲ふくくや 芭蕉う那

女の傘持たれ尔

膚了りハ傘借れくはの霞う那

布袋の耳とくく曇り

ニ度目ハハ字折られり 郭一云

推りし牛

解し搦ぬるふくふ牛もそは供哉

稲つり画し

新茶やニ度目の脊戸に稲を山

月一鴨の

物うおとそをゆして月取鴉の那

長靴の振りり物取鴉の画に

約の初こ流ふ中む長婦くを

雨う節云空と下はと下に有る

義もあしく遊えくひりきやしくまに

組礎の蓋尔賛

海さや産後後に磁器海子殺

空山拾得り

一葉中川帯もそとに噪の那

覗子の報ととく画尔

芋掘の名いしくしくや報とく

牛系義蓋の図尔

此出立んたしく雨乃れしく星

冬木に猿猴

猿もよ子蓋所外冬木立

空に村務の

木うしくや空に漆く足ら夕務

蕉菰客にみの蓋子像賛

さりれしくさりねあう零に杖

獅子に牡丹

ふにたしふ禰子や大尺のたおし
大志のち拵り袋つりくかきりるよ
 ゆく年や小槌ハ餅の写に合ん
漱の柄く雀の
 かはうりれ田舎と菊ふとそあうり
茄子小角豆の赤
 初ものゝ市へく、初ね我部一云
竹に雀
 英一うおや子猷う於森鳴ふ雀
 女の帯にけりう

雲の暮しこ能巨魁一 待人う
 尾ふりう落一
 芋よりも尾ふりや一層とほのき務
安士の旗よ中あね画
 寝くうり澤ふり、安士能時雨うり
月の下に兔の赤
 ろ〜月とわけさ兔う毎乃陰
猿と一の
 三節足れ勢ともろろに猿と一
鐘に榻下ふふ茄子の馬一

地となりふり際しるれ ぶの陰

負介

二見文卷の重書三句

月正にこつ流れ垢部や 二尺く
靡も波のしほりや 中さこ形
後わふさや 是も二尺れ くる表

迴文

笑く尺つ稿中く待く先のつみ州
よこれぬ是好先入り

五十一

いろくしひ中より確ふじ人哉
まら漢く、長秋年一の書う那

題より

於中より又之りまの森所、然
版くうらに書されふ、くわ

附録

延享二年

改組路紀行

乙丑の年

君にまこひきり、あ卯月うの戸
残れく尾陽より、まの一年とま
なくぬまれ、まのとつめ、まの
人く、まの、まの、まの
并に、まの、まの、まの、まの
まの、まの、まの、まの、まの

涉くはるまはかりしきぬもありて
はるまはかりしきぬもありて
まはかりしきぬもありて
しきぬもありて
仕度れ方のよろしきぬもありて
馬槍のいりしきぬもありて
老村童にまはかりしきぬもありて
まはかりしきぬもありて
店の解酒ハスね新しきぬもありて
陣しきぬもありて

せじまの山とありしきぬもありて
うくわりてありしきぬもありて
人ききもありしきぬもありて
乃くはかりしきぬもありて
おのひしきぬもありて
とせじまの山とありしきぬもありて
まはかりしきぬもありて

系る系るしきぬもありて
此夜上尾に汝が

七

徳信寺に直交の像ありやう
 そのありしころは
 徳信も果を坊もや
 今東にたおと徳信
 八日くといえふありし
 くくく好しとけしや里もあつや
 くくくくくくくくくくくくくくく
 徳信とは——竹取系とくくく
 ともくせりおれ人へりすははせ
 念のま向りせりく致々くくく

中よりみらるるに赤きうりやく
 といひややせつ

徳信もやうく遠くともちり乃そか
 此板板鼻にゆれ

九日

確氷峰と越作の盤石といふ
 險路とくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくく
 揚の夏くくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくく

阿のりり子として無事命とつて於
 十二のころに屋敷を築きしをこひて
 かへりけるにええりりりりりり
 山とていふれは六田はこれ八藝格山
 やわらゆきうーとておま髪山うも
 うらけーていりりりりりりりりり
 ゆーりりりりりりりりりりりりり
 やわらんせしとていりりりりりりり
 うらけー運気論といひりりりりり
 書と九部ーりりりりりりりりりり

うみうーとていりりりりりりり
 まりて交かーと後うつりれと後れり
 かりりりりりりりりりりりりりり
 ねとていりりりりりりりりりりり
 ねとていりりりりりりりりりりり

十一日

和田作とあけりりりりりりりりり
 ねとていりりりりりりりりりりり
 うらけーりりりりりりりりりりり
 ねとていりりりりりりりりりりり
 うらけーりりりりりりりりりりり

是より先くやぐれ雷のたつくは
 多々六時より夜半まで中一
 月けけの思尺もワのぬかや
 中一もくは申す一山ほくまに
 行る傍山形ふより介と漢語
 ひ一岩のそりもくらくれた他とく
 か一くくく山くくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくく
 去くくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくく

本町、と申す

十二日

六福修くく山村氏う幸に入ら
 せまふ家取つてくくくくく
 下にもくははきくくくくく
 形くくくくくくくくくくく
 ころくくくくくくくくくくく

組板れつれりハさくくくくく

十三日

大井にいでる

山井にいでる竹の子をさうり
桶の蓋をさうり竹の子をさうり
なかりこの名をさうり
竹の子をさうりておもしろい
うらうらうらうら

井の子にさうりておもしろい

十五日

土田にゆきわらふは家と名づくる

このありておもしろい

薙の尾系

まの歌

皆拾ふ事一と初層
若の若のふと一と常一清まけぬ
月より若とならぬわらわらぬ
おれさひくれ外を ほうき
美草もやまおれふと若の掃り
かくしつちもふささ白く
おれおれりてわらの常問うれ

昂のくち杖うふりりむめのむ
 垣ゆひよ一枚乞ひぬ梅のうら
 好のほくや舞あさりの梅さぬ
 去の只穀すも梅ふかしくさり
 折るぬのり結あし備さし梅の歌
 葉りあし遠入さハ梅ハ隣り船
 梅さる垣や娘のあらしむじく
 尋ししあましりほあやむ初まが
 うら花ほや近江の君乃雪 疎
 後場ふ茶屋うとしし柳ふ

翁より人々なく柳うたよ
 凍解や市見ふ梅のうられさる
 年一葉の後立まの雪のうら
 万葉の梅子門よ結つ二月は
 初年や右教ふ翁といそくせさ
 涅槃今や梅あさまてとらぬ世
 本代やまうし別後そのを履丸
 信法路ハ雲らと彼山なあらうか
 事あしりしりあ北しき悪う事
 しるや作う味也しし

井ノ戸の跡さとしりぬ橋の意
 あつりも十日をりや橋の意
 二夜うら新てもあつり
 月か〜仰〜橋の散るやあつり月
 勝月味味苦町の白ひや
 塔の葉や付あふ白ふ類あつり
 山吹の塔あや養も仰〜て有
 山吹の塔あや養も仰〜て有
 やあつりや橋よあつりぬ忘る
 塔あつりしりやあつりの後あつり

葉の葉や車のあつり
 花あつりして折らぬ橋あつり
 麦一畝あつり橋あつり
 雲あつり〜あつりあつり山橋
 誰う神とあつりあつり神の石
 海あつりあつりあつりあつり
 橋とあつりあつりあつりあつり
 あつりあつりあつりあつり
 舟あつりあつりあつりあつり
 右あつりあつりあつりあつり

蘇州

六十八

照りもせぬ中りとも果は 相めふ
卯の花や ちりみくらんえきり
水鏡啼や 音の付 門のほく忘
こゆるもの おいて町り 暮らゆ
詠ふはくも 憂ふも 迎ぬりらうふ
帝ふんる 若子の山土 中月 晴
お月あやゆむさけりとの 月一夜
お月あやゆ丁半丁おかしらり
麦粒や 糠の中り 大糸系
初時や 里ハ志川より 麦かこうり

麦粒や ちりみくらんえきり
水鏡啼や 音の付 門のほく忘
こゆるもの おいて町り 暮らゆ
詠ふはくも 憂ふも 迎ぬりらうふ
帝ふんる 若子の山土 中月 晴
お月あやゆむさけりとの 月一夜
お月あやゆ丁半丁おかしらり
麦粒や 糠の中り 大糸系
初時や 里ハ志川より 麦かこうり

古雑書

三十一

穂の節

助勢や舞吹く捨
 子帯や張う一日のまろり
 如鳥や皇太子川之橋の節をく
 作う帯の肩あしにて里乃一転切
 鶴やせしむ一任穂のまろり
 桐やゆき人毛足 新やろり
 粟の穂乃りる川く秋とあふり
 白くけこころ人や吹く小虫の音

葛西

七十一

うろく守り せと物をもの初り
 散や強り せと物をもの初り
 送火や借手 挑灯ハ
 事ぬおる 筑波に
 けり水の 紅橋に
 竹伐の 甲や
 事ぬおる せと物をもの初り
 三ヶ月ハ下 せと物をもの初り
 夜に 物も冷し
 外さぬ 猪の中

孫りり せと物をもの初り
 麻道ひよ 山の 燈籠
 赤染る 麻ね 梅
 十六夜や 只わ
 隣一 度言ふ
 麻守りの 客
 庭に 咲け
 咲く 咲く
 迎水の 浪
 一 家の 浪

強持こ人々田刈 是れ中 秋の暮
 人のほく 産し 是れ 秋の暮
 客々 暮々 産し 是れ 秋の暮
 人々 産し 是れ 秋の暮
 菊の 産し 是れ 秋の暮
 此の 産し 是れ 秋の暮
 生 産し 是れ 秋の暮
 こ 産し 是れ 秋の暮
 今 産し 是れ 秋の暮
 す 産し 是れ 秋の暮

秋も 産し 是れ 秋の暮
 刈 産し 是れ 秋の暮
 夕 産し 是れ 秋の暮
 夕 産し 是れ 秋の暮

七十四

その部

きかしくぬき 桂子に掛たり 初時
今更にあらさく 吾も麦刈 初時
岩もまきしころり すすも 初志
徒つねくもらぬ人お志られきり
落葉あもあけ 初さくく 蓮橋
源流あくぬき 桂子に掛たり 初時
初雪や信 吹くひける 志を 願
まじし 海へあり 白く 顔あり

三十五

我の彩心 養後君。素直下の頼に似せし
 の集梓川の半と先一筋なり。或人
 僕一対していき。あられけ半の止
 祢う。おの品源めまらるるをゆく。これ
 かの世の底を叩く。似て世のはさうなき
 批判もはれ。さうと。僕守りて捨り
 思ひす。さうと。其云と若きなり
 史莞爾と。て甲。おのハもと本藩世
 臣の家。い。されて業と。さうの武半あり。
 幸に治世。い。遇。武の竹。官の賜に

問

序

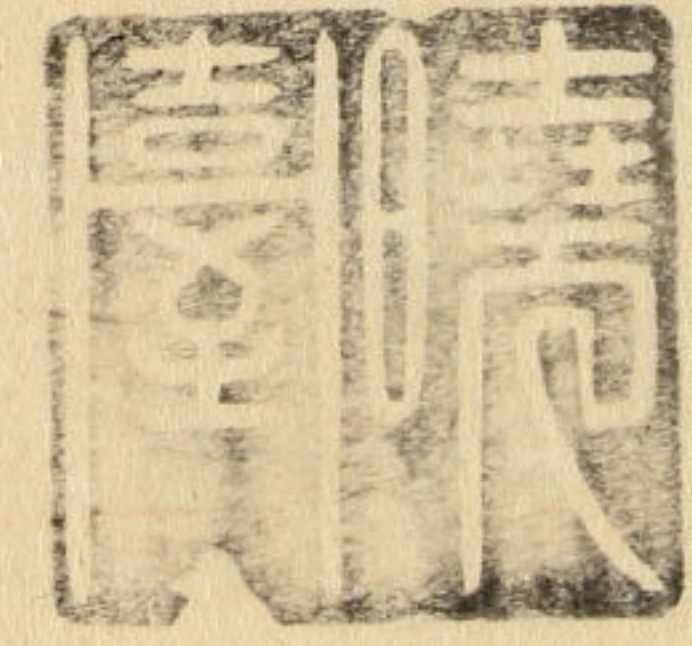
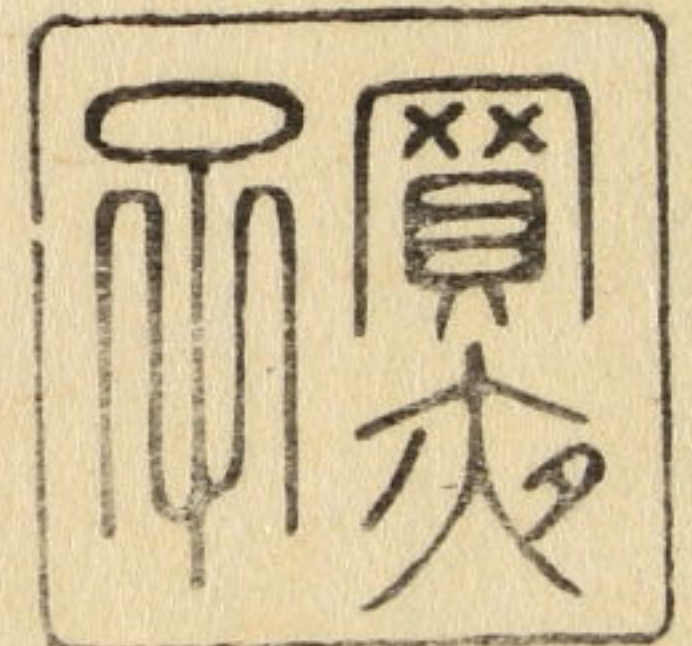
卷二 曉臺

今とむり。懐く小義の神と見居ニミし
 らる。白小神と入る。ま。難さ。也。世
 にまひりてけり。福。ま。路。と。と。の。家。人。古
 今。指。と。倒。ま。た。ま。ま。魂。六。つ。あり。
 穴。か。く。火。三。つ。の。山。れ。筑。二。奇。の。比。あ。を
 あ。つ。は。六。つ。の。神。を。凡。徳。比。具。雅。頌。ふ。を
 ち。あ。く。ま。は。詩。前。の。注。釈。よ。く。ハ。法。家。を
 況。區。く。あ。く。く。大。に。面。倒。や。他。諸。乃
 家。を。魂。を。つ。つ。く。後。の。符。怪。と。ん。せ。

魂はたふさぐ。奇兵の形容と然し。哀
樂の事、然るも人といふなり。されど
明眼の術ありては、さういふこと、さういふ事
は、合をうて、さういふなり。と、此の書、其の集を
本藩の、その政を、水と稱の、と、さういふなり。
凡そ五百有余章。其の編、さういふ。其の
さういふ、其の政、さういふ。其の集、
其の風流、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、

其と折^{クキ}市ハ。理屋の冥守ハ肝と消さしめ。其
が観念のうにぬれぬ。其の、其の、
其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、

京極英門の秀人より編輯ありしもの巻を並
 むるごとし。丁時明和四年亥二月。知事
 全達下。是と様にて存置たりしめん
 とて。子紙之編に耕カヤセと僕又需せし。
 隠居仕りし頃。いかにし。いかにし。いかにし。
 書と云ふ雨巻の末欄より掠て。余自ら
 抄りしと贅言と云ふ事。一としり



蘇我集再刻の清八席より
 又んより。蘇我集後二編の序
 後集の今集より後より自ら抄りし
 ありしに似せし。かゝるふ加く物に

天明二の五五美

送月堂

文樵

書肆

風月堂孫助

七
P.

